

はじめに

血液細胞(血球)の検査の中心は、血球計数と血液像です。前者は自動血球計数器の進歩により装置に任せてよい部分が多くなってきましたが、後者に関しては、今でも、そして、これからも、検査室での鏡検が中心であり続けることは間違いありません。

我々の末梢血、さらには、骨髓液中の血球は、血球自体の疾患はもちろんのこと、感染症などを含む幅広い多くの疾患においても形態の変化が起き、その注意深い血液像の観察が重要な診断の糸口になることが少なくありません。この血液像の観察の重要性は、染色体・遺伝子検査、免疫学的検査など最新の分子生物学的手法・技術が診断に導入され、分子標的療法の目覚ましい発展がみられる造血器腫瘍においても同様です。形態学と遺伝子(ゲノム)情報が相補うものであることは、遺伝子異常を基礎にした WHO 分類の時代においても変わらず、また、これまでの血液学の流れを踏まえましても、診断・研究の入り口としての形態学の重要性は不変と考えられます。

他方、血液診療医の繁忙度の増加など種々の要因により、検査を通した血液疾患診療において、血液検査室の果たす役割はますます大きくなってきています。血液像の観察を含む血球検査は、検査結果が診断・治療に直結することが多く、血液検査室の責任はまさに重大といえます。例えば、Auer 小体を有する細胞を見逃さないことにより急性骨髄性白血病の診断が下されたり、破碎赤血球の観察により血栓性微小血管障害症(TMA)の診断が下されたりするなど、顕微鏡を通した血球観察が早期診断に結びつき、患者さんの早期治療、治療成績向上につながることは日常診療で多く経験することです。

東京大学医学部附属病院検査部の血液検査室のスタッフは、血液像観察の重要性を認識し、日々、検査に励んでいます。本書はその日頃の検査業務の中で遭遇した貴重な症例をまとめあげたものです。これから血液像を学ぼうとされる初学者の指南書として、また、ある程度経験を積まれた方が知識のまとめとして、それぞれ活用していただけるように配慮いたしました。本書により、血液像観察の重要性を体感し、日々の検査業務・勉強にお役立ていただければ、本当に嬉しいと思っています。

編集者一同